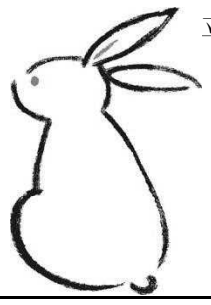
平川塾ニュースレターNo.5

2023年７月１日発行

〒558-0003　大阪市住吉区長居３－３－２５
メゾン住吉壱番館　１階－５
平川塾　06-6695-0181

Shiro-usagi

白兎・素兎



平川塾HP　アメブロ　YouTube

文責：平川　達三

「ふれ合う」から「向き合う」へ

2023年06月09日(金) アメブロ〈改筆・加筆〉

動画を編集したりウェブページを改装したりと、ここ１週間は、ＰＣのモニターとにらめっこをする日々が続いておりました。

その中で、中高一貫校に通われる遠隔授業（ＺＯＯＭ）の生徒さんから、学校の古文の授業が分からなくなってきたので（古文の勉強を）きっちりとしたいというオファーを承ったのです。

中高一貫校の場合の大抵は、中学３年生で高校古文の領域に入りますが、進度を伺ったところ、その予想通りの展開がなされていました。

というのは、例えば、「動詞の四段活用・上二段活用・下二段活用」とか、「形容詞のシ活用とシク活用、あるいは、「形容動詞のタリ活用とナリ活用」など、これらの言葉が生徒さんから発せられると、高校生の領域に入ったことが分かるほど、古文に関しては明確なのですね。

ちなみに、現代国語の文法の場合は、四段活用ではなくて五段活用であるし、上一段活用・下一段活用のみで、上二段活用・下二段活用の分類はなされていませんし、形容詞や形容動詞にいたっては「～活用」という区別もありません。

それに、中学校で学ぶ古文の文法は係り結びの法則のみで、つい３年ほど前までは「ぞ・なん・や・か・こそ」という言葉があらわれたところに線が引かれていて、「係り結び」と答えることができれば正解というお粗末なものでした。

その後の教育改革で多少は難しくなったとはいえ、「ぞ・なん・や・か」の場合はあとに結ばれる用言は連体形になり、「こそ」の場合は已然形（いぜんけい）の用言で結ばれることを知っていて、28ある古代日本語（古文）の助動詞の中から出されるのは「けり」と「たり」に限られ、連体形なら「ける／たる」で、已然形なら「けれ／たれ」で結ばれると答えることが出来ればそれで良しという、これまたワンパターンで、お粗末さという点では何ら変わっていません。

それはともかく、そのＺＯＯＭ生徒さんのお母様から、幸いにも現代国語の成績が急激にアップし、学年上位に位置できたことへのお礼のメッセージと共に、

「古文の　ＺＯＯＭ授業がおわったあとで、『めちゃくちゃ勉強になる！』と、ひとこと言ってました。本人主導で始めることができて本当に良かったです。」

というメッセージも戴けたことは、今後の大きな励みになりますし、更に次のような決定的なメッセージをいただいたことは、至上の喜びでもありました。

「小学校の国語はいろんな文章に出会う機会でしたが、中学生の３年間は国語と向き合う大切な時間なんだと親として気付きました。先生は常に国語は一朝一夕で身につくものではないとおっしゃっていて、私も小学校から中学校までの国語との向き合い方を息子を通して見続けてきて、今や国語は息子の武器にまでなろうとしてます。」

ここで、あなたにお伺いします。このメッセージの中に、お母様だからこそ書くことのできける文言があるのですが、お気づきいただけましたか？

それは、

「小学校の国語はいろんな文章に出会う機会でしたが、中学生の３年間は国語と向き合う大切な時間なんだ」

というところです。

それは、こういう理由からです。

私は仮にも指導者ですから、小学１年生の読解問題であろうと高校生のそれであろうと、同じ「分析」という頭脳作業であり、その結果を基にした指導であるのです。

ですから、本来ならば最も基本的であるはずの「色々な文章に出会う」という楽しさを伝えるという私という指導者の想いが、ともすれば希薄になり、分析を通して生徒さんに理解を促し、その積み重ねで読解力をアップさせることのみに注視してしまう傾向が強くなります。

そこで、いろいろな文章に触れさせるというコンセプトが強く反映されている学年はどこまでで、どこから「向き合う」というコンセプトでの指導方法へと軌道を変えていくべきかなのかを再検証してみたのです。

すると、あくまでも私の塾舎内の教材での判断であり、非受験生という前提ですが、４年生の中盤から５年生の１年間という比較的長い期間に、子どもたちの意識を変えていかなくてはならないことが分かりました。

これを難関校への受験指導に置き換えると、小学１年生から「向き合う」という概念で指導しなければ間に合わないということになります。

しかしながら、難関校受験を目指すからといって、読書が好きな子どもさんから本を取り上げて、目にする文章を全部「激ムズ」の読解問題にする必要はないと思うのですね。

それは、読書は優れた言葉や文章、あるいは表現と「ふれ合う」ための大変良いチャンスであるし、そのチャンスを上手に利用するという意味で、

「この表現、なかなかイイよね。」

というように、ときには子どもさんと一緒に大人である自分も読みながら、まるで「合いの手」のような言葉を、あくまでも押しつけがましくならないように、むしろこちらの独り言のように発することで、初めのうちは

「そうかな～？」

と思っている生徒さんであっても、大人が発する「合いの手」が、いずれは語彙数を増やし語彙力のアップが要求される、いわゆる「向き合う」ことに移行した際には、言葉をかみしめることができるという感性レベルに達すれば良いのです。

そのように考えたとき、小学１年生の読解問題であろうと、高校生のそれであろうと、同じ「分析」という頭脳作業であり、その結果を基にした指導であるという私なりの「常識的な概念」には、ある種の盲点というのか、もっと意識を改革改良するべき点があるのではないかという自問自答の必要性を痛感させられるのです。

「４年生とか５年生になったら内容が急に難しくなるよね。」

というのが一般の親御様の漠然とした概念です。「漠然とした概念」だなんて、なんだかとても失礼な表現をしているような気がするのですけれど、失礼の上塗りをお許し願って、次のことを私から問われたら、どのように答えていただけるでしょうか。

「では、何がどれだけ難しくなるのか具体的におっしゃって下さい。」

おっと、これはちょっとお答え辛い質問ですね。では、質問を次のように変えましょう。

「では、難しくなるということに対して具体的なご心配をおっしゃって下さいませんか？」

これに対して、指導者にとって「漠然と」は許されません。なぜなら、親御様が「漠然と」持たれていることを言語化し具現化するのが私たち指導者の仕事であり、「ふれ合う」から「向き合う」へ指導方法の軌道を変えねばならないというコンセプトの方向転換を脳裏にたたき込まないといけないのですから。

このことは、国語だけでなくて算数にも同時的に起こってくるのが４年生の中盤から５年生の１年間です。

親御様はご自身の想いを自由闊達に表現してくださり、私へのお礼の意をこめて、ときには強い想いのこもったメッセージを下さいます。

そのなかに私の「常識」を見事に打ち破る「非常識」がある。

正直申し上げて、国語読解指導について、ややに詰まっている部分があったのでが、大きな風穴が開けられたことでアタマの中の風通しが大変良くなりました。

そこで、今号のニュースレターは、読解問題に対してどのように向き合って分析し、それを基に生徒さんにどう指導しているのか、その現場の一部に過ぎませんが、お話を進めていくことにします。

小難しい内容が続きますが、コーヒーや紅茶を片手に、ご参考までにお目を通していただければ幸いです。

なお、次のページは「小学生５年生国語コア」の問題画像ですが、著作権に関わりますので、ブログへのアップも塾のウェブページへのアップもしていません。つまり、このニュースレター限定の記事となります。

練習しよう

大学の先生である関野さんが、学生たちに、「カレーライスを一から作る」という課題を出した。これは、材料や食器などを一から作るというもので、筆者はこの取り組みを取材している。今、北島さんという人の指導のもと、さいばいした稲をかりとったところである。

北島さんのところでは、太陽の下で①2週間ほど稲を干す。晴れているときはいいけれど、雨が降ったらすぐさまビニールがけに追われ、ずっと洗濯物を外に干すような、落ちつかない毎日をすごさねばならない。干した稲のまわりに棒を立て、鳥よけの糸を何重にも張っていく。

作業を終え、田んぼのまん中に干された稲の山をながめながら、関野さんはうれしそうにこういった。

「すごいね。水だけでこんなにできた」

②弱よわしい一本の苗が、水と土の養分で見事に育ったのだ。縄文時代から日本で受けつがれてきた米作り*。長い時間をかけて蓄積されてきた知恵や工夫が、できあがった米の背景にはたくさんつまっている。学生たちにも米作りの感想を聞くと、冨田さんは、

「草とりが一番大変だったかな」と、雨が降る中、田おし車*をおして歩きつづけた日のことをふりかえった。

2週間後、脱こく作業を行った。脱こくとは、まず稲から実をとり、実の外についた籾という皮のようなものをとりのぞいていく作業のこと。この作業をすると、米は玄米になる。さらに精米という作業をして、③いつも私たちが食べている白米になる。

干してかわいた稲をポールから外し、脱こく機にかけていく。すると、脱こくされたお米がどんどん米袋にたまっていく。「おいしいけど、か弱い」と心配された希少品種「ササシグレ」が、無事にできあがった。

とれたお米は全部で一20キロほどになった。品種のせいか、いつもより、収穫量は少ないと北島さんは話す。脱こくが終わると、米をとりのぞいたあとのワラをべつの機械で細かくくだいていく。

北島さんは、この④細かくなったワラくずを、田んぼにまきはじめた。

「これは、田んぼが作ってくれたものだから、なるべく土にお返ししようという考えです」

北島さんはそういって、田んぼ一面に大量のワラくずをまんべんなくまいていった。⑤細かくくだかれたワラは風にふかれてまい、きらきらと黄金色にかがやきながら、土にもどっていった。土の中で分解され、田んぼの養分となる。翌年にまた豊かな実りがもたらされるように、米を収穫した直後から、次の年の米作りの準備が始まっているのだ。

長い年月を重ねて、作られる土。それを思うと、「一から米を作る」というのは、本当は途方もなく時間のかかることなのだ。風にまうワラくずを頭や体にたくさんつけて、米作りは終わった。

（前田亜紀「カレーライスを一から作る」より）

注 ＊米作り＝縄文時代晩期から始まり、弥生時代に広まったといわれる。
＊田おし車＝草とりをする道具。

1 ――線①「2週間ほど稲を干す」とありますが、この2週間を、筆者はたとえを用いてどう表現していますか。その部分を、文章中から二十三字でさがし、初めと終わりの五字を書きぬきなさい。

～

2 **心情** ――線②「弱よわしい一本の苗が、水と土の養分で見事に育った」とありますが、この背景には何があると、筆者は感じていますか。文章中から二十字で書きぬきなさい。

3 この文章を、作業として何を行ったかという観点で前半と後半に分けると、後半はどこから始まりますか。後半が始まる段落の初めの五字を書きぬきなさい。（句読点も字数に数えます。）

4 干した稲を、――線③「白米」にするまでには、どんな作業をしますか。文章中の言葉を使って、二十五字以内で書きなさい。

5 ――線④「細かくなったワラくずを、田んぼにまきはじめた」とありますが、こうするのは、どういう考えがあるからですか。文章中から三十三字でさがし、初めと終わりの五字を書きぬきなさい。

～

6 **情景** ――線⑤「細かくくだかれたワラは風にふかれてまい、きらきらと黄金色にかがやきながら、土にもどっていった」とありますが、この情景描写には、筆者のどのような気持ちがこめられていますか。最も適切なものを次の中から選び ［　　］ なさい。

ア せっかく収穫をもたらしてくれた稲が、ワラくずとなってしまったことを残念に思う気持ち。
イ 無事に収穫できたことを感謝するとともに、翌年にも豊かな実りがもたらされることを願う気持ち。
ウ 今年は少ないながらも収穫できたが、翌年に実りがもたらされるかどうかはわからず、不安に思う気持ち。
エ おいしいけれど弱いといわれた品種を育てたことで自信を深め、きっと翌年もうまくいくと強気になる気持ち。

7 **心情** 米作りを終えて、筆者の心に強く残ったことは何ですか。次の［　　］に当てはまる言葉を、文章中から書きぬきなさい。

「一から米を作る」というのは、［　　］だということ。

〈大問1〉

問題文の中に「たとえを用いて」と書かれているので、文中の「～のような」という表現か所を探しましょう。

二十三字という制限と「書きぬき」の条件が与えられている場合、どこから書けば良いかではなくて、「どこで書き終わるか」という「結び」を発見するのが解法のポイントです。

まず、「～のような」という部分については3行目に「洗濯物を外に干すような」とあるので、ここにねらいを定めます。

次に「洗濯物を～」の周囲の文を見ると、1行目から4行目の「晴れているときは～ねばならない。」に設問への答をひそませていることが分かりますが、文字数が多すぎます。そこで、「たとえ」の場合は名詞形で終えることが多いので、答は「毎日」で結ぶとうまくいくことがわかります。

結びの部分が分かったので、「毎日」の「日」を二十三文字目として逆に文字を数えていきます。すると「ずっと」の「ず」から書き始めれば字数と合うことが分かるので、これが答の部分となります。それと「2週間ほど稲を干す」のですから、かなりな期間ということになりますが、「ずっと～」という言葉は長い期間を表す言葉なので、答えにふさわしいことを確信できます。

〈大問2〉

これも書きぬきですが、「この背景には何があるのか」という、問題自体の言葉、特に「背景」という言葉が難しいので、何を問われているのかが分からないという生徒さんが出て来ても不思議ではありません。現に、「『背景』って何？」と問われて即座に分かりやすく説明せよとなると、大人でも戸惑ってしまいます。

そこで、文法的なスキルを使います。

文章を読み進めると11行目に「できあがった米の背景にはたくさんつまっている。」という述部がありますから、その主部（主語）に当たるところが答えになるはずだと分かります。

そこで、主語になる場合は「～は」「～が」という表現になっているのではと予測すれば、10行目から11行目にかけての「長い時間を～智恵や工夫」であることが分かり、二十字という指定文字数にもかないます。

〈大問3〉

問題文の表現が難しいですね。「作業として何を行ったという観点で」というところです。おそらく、子どもさんにしてみれば何を尋ねられているのかを把握できないかも知れません。そこで、「作業として」という言葉に注目してみましょう。すると、14行目までが「米作り」のときの大変さが書かれていて、15行目からは「脱こく」という作業に変わっていることが分かりますから、答は「2週間後、」という句読点をふくめた五字ということになるわけです。

〈大問4〉

この段落のテーマは「脱こく」ですから、15行目の「脱こくとは」から18行目の「白米になる。」までが「白米にするまでの作業」ということになります。

ところが、「脱こくとは～白米になる。」を全部書くわけにはいきませんから、幹となる部分と枝葉となる部分に分けましょう。大切なのは、「稲から実落とす」ことです。次に、「籾を取りのぞくこと」で、最終的に「精米すること」ですから、これで「幹」となる部分を選び出すことができました。あとはこれを上手につなぎ合わせて、「稲から実を取り、籾を取りのぞき、さらに精米する」（「さらに」はなくても良い）とすれば二十五文字以内に収まります。このときに注意しなければならないのは、文の結びである句点（「。」）も一字に数えなければいけないので、二十四文字以内に収める必要があることです。原稿用紙に作文をするわけではないので、最後のマス目に「る。」の二文字を入れるとアウトです。勘違いと油断は禁物です。

〈大問5〉

この文章で特徴的なのは、せりふが時折挟まれていることです。漫画でもそうですが、せりふは何気なく書かれているように見えますけれど、実は必要最小限しか書かれていません。ましてやこういう説明的文章にせりふが挿入されているときは、特別の意味があるのです。それを前提にして読み進めると、北島さんのせりふの中に答の部分がありそうだという予測がつきます。実際に、「田んぼが作ってくれたものだから、なるべく土にお返ししようという考えです。」とありますし、設問内にある「どういう考えがあるからですか」と符合しますね。ということで、「田んぼが～考え」までが答えになります。ただし、注意必要です。「どういう考え」いうように「考え」という名詞で問われているので。「考えです」まで書いてしまったらアウトですから、「考え」でとめるようにしましょう。

〈大問6〉〈大問7〉

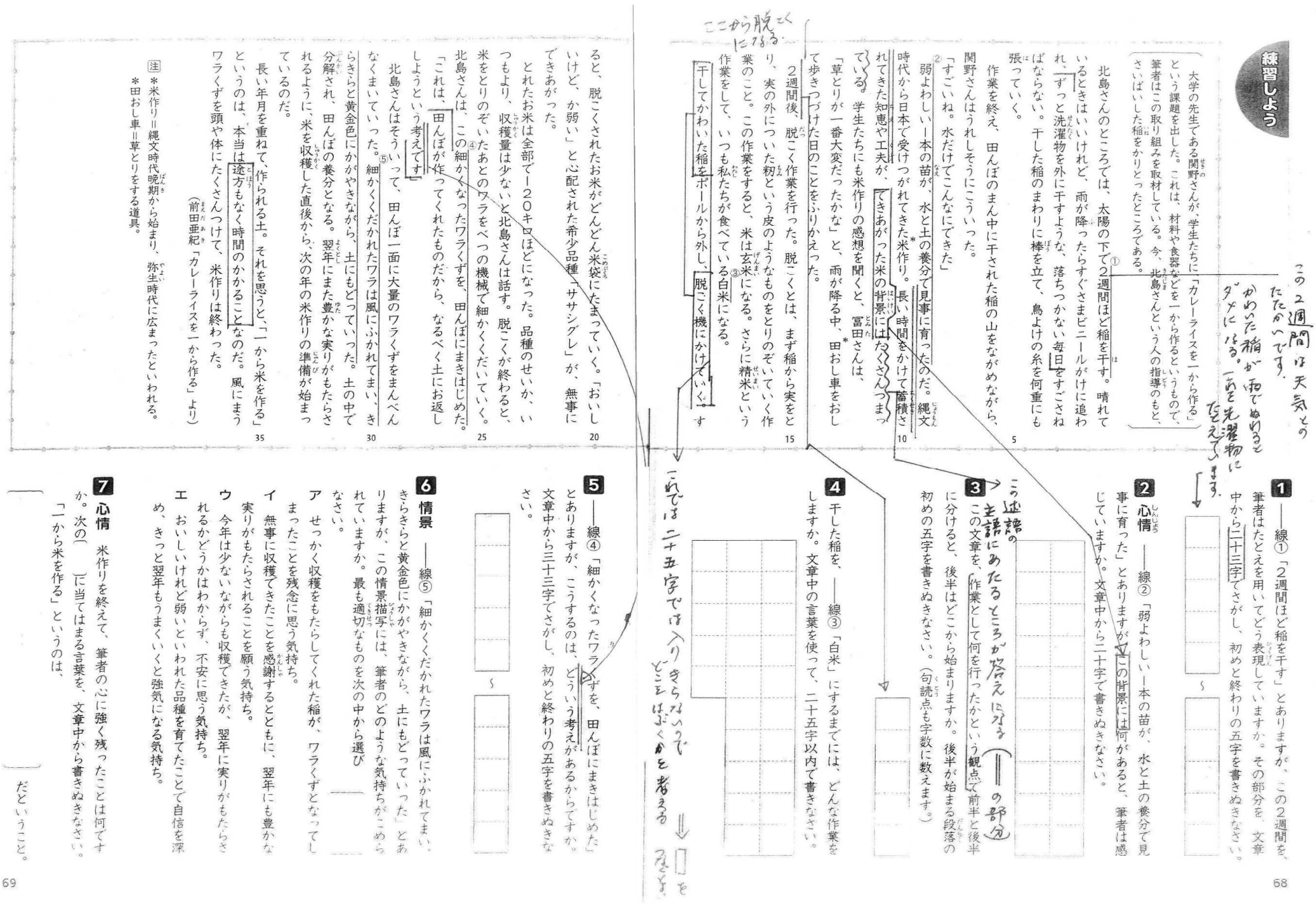
文章の全体把握、つまり、まとめの問題です。ここまで来ると、最終段落の結論部分殻からの問いになるので、答えられる生徒さんが圧倒的に多くなりますね。

いかがでしたか？

こういう解き方を「論理的に解く」と言いますが、これをお子さんだけでさせるには、そのお子さんに相当な技量がないと出来ませんし、指導者である私だけでなく、ご家庭で学習なさるにしても、口頭だけではその場ではなんとなく理解させることは出来きても、あくまでも「何となく」なので、もう１回やり直したとしても、子どもさんの頭の中で再現させることは、とても難しいことです。そこで、特に読解問題が苦手な子や、なかなか文章に向き合えない子どもさんには、下のようなポイントを書き込んだ「やり直し課題」を手渡し、読解文章に向き合えるようなきっかけ作りをしていきます。

先ほどの解説を読んで下さった直後なので、下のようなものをご覧になると、「答を教えているみたいにならないか」と心配される方も少なくありませんが、初歩の段階では、これでも答えに窮することが少なくないのです。

目的はあくまでも、何が何でも正解を導きだせるようにすることではなくて、読解問題に接しさせることで、ヒントを通して「向き合い方」を理解するためのきっかけをつかんで欲しいということですし、この問題に接する子どもさんの頭の中で、何度でも同じことが再現されない限り実力は身につきませんから、初期の段階ではこれで構わないと思っています。もっとも、中学入試となるとそうも言ってられないので指導法はおのずと変わってはきますけれど、その方法はまたの機会にお話することにしましょう。



練習しよう

大学の先生である関野さんが、学生たちに「カレーライスを一から作る」という課題を出した。これは、材料や食器などを一から作るというもので、筆者はこの取り組みを取材している。今、北島さんという人の指導のもと、さいばいした稲をかりとったところである。

北島さんのところでは、太陽の下で①2週間ほど稲を干す。晴れているときはいいけれど、雨が降ったらすぐさまビニールがけに追われ、ずっと洗濯物を外に干すような、落ちつかない毎日をすごさねばならない。干した稲のまわりに棒を立て、鳥よけの糸を何重にも張っていく。

作業を終え、田んぼのまん中に干された稲の山をながめながら、関野さんはうれしそうにこういった。

「すごいね。水だけでこんなにできた」

②弱よわしい一本の苗が、水と土の養分で見事に育ったのだ。縄文時代から日本で受けつがれてきた*米作り。長い時間をかけて蓄積されてきた知恵や工夫が、できあがった米の背景にはたくさんつまっている。学生たちにも米作りの感想を聞くと、冨田さんは、

「草とりが一番大変だったかな」と、雨が降る中、*田おし車をおして歩きつづけた日のことをふりかえった。

２週間後、脱こく作業を行った。脱こくとは、まず稲から実をとり、実の外についた籾という皮のようなものをとりのぞいていく作業のこと。この作業をすると、米は玄米になる。さらに精米という作業をして、いつも私たちが食べている③白米になる。

干してかわいた稲をポールから外し、脱こく機にかけていく。すると、脱こくされたお米がどんどん米袋にたまっていく。「おいしいけど、か弱い」と心配された希少品種「ササシグレ」が、無事にできあがった。

とれたお米は全部で一２０キロほどになった。品種のせいか、いつもより、収穫量は少ないと北島さんは話す。脱こくが終わると、米をとりのぞいたあとのワラをべつの機械で細かくくだいていく。

北島さんは、この④細かくなったワラくずを、田んぼにまきはじめた。

「これは、田んぼが作ってくれたものだから、なるべく土にお返ししようという考えです」

北島さんはそういって、田んぼ一面に大量のワラくずをまんべんなくまいていった。⑤細かくくだかれたワラは風にふかれてまい、きらきらと黄金色にかがやきながら、土にもどっていった。土の中で分解され、田んぼの養分となる。翌年にまた豊かな実りがもたらされるように、米を収穫した直後から、次の年の米作りの準備が始まっているのだ。

長い年月を重ねて、作られる土。それを思うと、「一から米を作る」というのは、本当は途方もなく時間のかかることなのだ。風にまうワラくずを頭や体にたくさんつけて、米作りは終わった。

（前田亜紀「カレーライスを一から作る」より）

注 ＊米作り＝縄文時代晩期から始まり、弥生時代に広まったといわれる。
＊田おし車＝草とりをする道具。

1 ――線①「２週間ほど稲を干す」とありますが、この２週間を、筆者はたとえを用いてどう表現していますか。その部分を、文章中から二十三字でさがし、初めと終わりの五字を書きぬきなさい。

2 心情 ――線②「弱よわしい一本の苗が、水と土の養分で見事に育った」とありますが、この背景には何があると、筆者は感じていますか。文章中から二十字で書きぬきなさい。

3 この文章を、作業として何を行ったかという観点で前半と後半に分けると、後半はどこから始まりますか。後半が始まる段落の初めの五字を書きぬきなさい。（句読点も字数に数えます。）

4 干した稲を、――線③「白米」にするまでには、どんな作業をしますか。文章中の言葉を使って、二十五字以内で書きなさい。

5 ――線④「細かくなったワラくずを、田んぼにまきはじめた」とありますが、こうするのは、どういう考えがあるからですか。文章中から三十三字でさがし、初めと終わりの五字を書きぬきなさい。

6 情景 ――線⑤「細かくくだかれたワラは風にふかれてまい、きらきらと黄金色にかがやきながら、土にもどっていった」とありますが、この情景描写には、筆者のどのような気持ちがこめられていますか。最も適切なものを次の中から選び ＿＿＿ なさい。

ア せっかく収穫をもたらしてくれた稲が、ワラくずとなってしまったことを残念に思う気持ち。
イ 無事に収穫できたことを感謝するとともに、翌年にも豊かな実りがもたらされることを願う気持ち。
ウ 今年は少ないながらも収穫できたが、翌年に実りがもたらされるかどうかはわからず、不安に思う気持ち。
エ おいしいけれど弱いといわれた品種を育てたことで自信を深め、きっと翌年もうまくいくと強気になる気持ち。

7 心情 米作りを終えて、筆者の心に強く残ったことは何ですか。次の（　　）に当てはまる言葉を、文章中から書きぬきなさい。

「一から米を作る」というのは、（　　）だということ。

「副教科」と言うべからず！

今でも時々、こんな形で卒塾生が訪ねてくれることがあります。

「先生、楽譜の読み方と書き方を教えて下さい。」

こういうパターンは大抵は男の子です。

中学生のときは

「君は音楽は聞かへんのん？」

と尋ねるワタシの言葉を振り払うかのように、

「音楽なんかショーモナイ！」

とか、
「音楽なんてやかましいだけやん！」

と言っていた子ほど、何がどこでどないなったんか、おそらく、どこかで転んで頭の打ち所があったんやろな～としか思えないような台詞（せりふ）をのたまうのは、これ如何に？

「どういう風の吹き回しなん？」

「いや･･･それが、　センパイにバンドに引き込まれて･･･。」

「先生～、オレ、バンドでキーボード任されて･･･。」

「ベースギターのあの低音のインパクトにヤられてしまって･･･。」

ほうほう、ウーファー（重低音）に魂を奪われたとな？

「先生、パイプオルガンの曲のＣＤって持ってはりますか？」

「クラッシック音楽なんか一生聞かへんわ！」

とか叫んどったよな～、確か。

事情を聞けば、あの重低音に心を奪われたとかで、ベースギターで再現できないか試してみたいとか。

理由は千差万別ですが、中学生のときは、

「音楽なんかナンであるねん！」

と言っていた子ほど、バンドに誘われ、エレクトリックギターを手にした瞬間、何かが降臨するのでしょうか、「どハマり」するのです。

そこでハタと気づいたことは、これ。

「オレ、楽譜、読まれへんやん！　全然分からんし！」

それでもＣＤなどを聞いて一所懸命に音を探してコピーする。

すると、もうひとつの大問題が浮上します。

「オレ、楽譜、書かれへんやん！　読まれへんし、書かれへんし、どないすんねん！」

ナンでこんなことが起きるのか、ずっとナゾの部分がありましたが、最近なんとなく解けてきたのです。

ちょっと難しい話になりますが、お許しを。

明治政府の富国強兵政策に由来するのが、現在の小中学校の音楽の教科書なのです。教育の大切さを頓（とみ）に感じた明治政府が施行した学制。その中に音楽教育も含まれていました。

大日本帝国憲法はドイツを見習って立憲されたことはご周知の通りですが、音楽もまた厳格なドイツ音楽とその教育法を基礎に、子どもたちに授けられたのです。

要するに、小中学校の音楽の教科書の中味は、感覚重視の音楽ではなくて、「音楽学」という学問なのです。

ところが、実際の音楽、特に商業音楽は、そういう作曲法を知らないけれど感覚的に作られているものが圧倒的に多いのですね。

勿論そうでないのもあります。

例えば、サザンオールスターズの曲はメチャクチャ厳格に作曲されていますから、聴き入れば聴き入るほどおもしろい！　コアな聴き方をすればするほど、すごい曲作りをしているのが分かってきて、ホンマにおもしろいのです。

でも、こんなのって、学校の教科書レベルでは到底分かりません。

教師時代に、試しに、ポップスを使って曲を分析したのを生徒の前で授業してみたら、大受けしたことがあります。

授業終了後、

「先生！　今日の授業最高！　めっちゃおもしろかった～！」

「毎回こんな授業やったら、　音楽絶対に好きになるわ～！」

という感じで、意外なものでした。

自分もかつては音楽の教師で教科書を使っていた身ですけれど、こんなことというのは気が引けるとはいえ、今の音楽の教科書の内容が、生徒が本当に知りたいと思っていることと如何にかけ離れているか、ということなんですね。

だから「音楽キライ」なのです。

いえいえ、それは音楽が嫌いなのではなくて「音楽の授業がおもしろくない」だけのこと。

高校生になり、何かをきっかけにしてあこがれのバンドの曲を一所懸命コピーしようとしたとき、その曲の作り方の凄さを初めて肌で知ることになるのです。

「君も大人になったな～。」

とか言いながら、基礎から楽譜の読み方を教えると、あれよあれよという間に全部覚えて帰って行きます。

教科書は基礎の基礎。音楽の授業はおもしろくないかも知れないけれど、必要なのです。もとい、必要になってくることがあるのです。

学校で学ぶ勉強のほとんどは基礎の基礎。音楽の授業と同じように退屈かも知れないけれど、将来思わぬところで役に立つことが多いですよ。

そういうスタンスで音楽の授業を受けて下さいね。だから、副教科と言わないで下さい。

「副」は「そえる」とも読みます。受験５科目とは別に「副教科」と言われることが多いし、このように言う人が圧倒的に多い。

音楽、技術家庭、体育、美術は受験科目の「副（そ）えもの」ではないのです。

この４科目は、ほとんどの人は受験には関係ないけれど、将来大人になったときに教養として現れるのです。教養はあなたの立ち居振る舞いそのもでもあるということにお気づきですか？

お寺の鐘が･･･

Ａ：ボクのマネするんやで。
Ｂ：うん、わかった。

という短い会話の直後からＡの仕掛けは始まります。

Ａ：お寺の鐘が
Ｂ：お寺の鐘が

Ａ：ゴーン
Ｂ：ゴーン
Ａ：ゴーン
Ｂ：ゴーン

･･･ＡはＢに「しつこいな」と思わせるほどの回数で「ゴーン」を繰り返し言わせたとどのつまりに、

Ａ：何回鳴った？

すると、Ｂは指を折りながら考え始めます。

すかさずＡが言ったのが、この台詞。

「アカンやん。ボクのマネして『何回鳴った』って言わなアカンやん」

そこで、ＢはＡにしてやられたことに初めて気づきます。

これ、小学生のときに私がよくやられたものです。「あ～！　やられた～！」と言いながらも、即座にめぼしい子を見つけては私も仕掛けたという･･･。

〈張良と黄石公のお話〉

中国の故事に、こんな奇妙なお話があります。

登場人物は張良と黄石公。張良は中国の漢王朝時代の将軍で、その武名は国中に響き渡っているほどでした。

彼がまだ若い頃、黄石公という老人から「太公望秘伝の兵法の極意」を授けられたときのエピソードです。

若き張良が浪人時代に武者修行の旅先で黄石公という、よぼよぼの老人に出会います。

老人は、自分は太公望秘伝の兵法の奥義を究めたものであるが、キミは若いのになかなか修行に励んでいて、見所があるから奥義を伝授してあげようと言うのです。

張良は飛び上がらんばかりに喜び、それからは「先生、先生」とかいがいしくお仕えするのですが、この先生、そう言っただけで何も教えてくれません。

いつまで経っても教えてくれないので、さすがの張良もだんだんイライラしてきました。

そんなある日、張良が街を歩いていると、向こうから石公先生が馬に乗ってやって来ます。

そして、張良の前まで来ると、ぽとりと左足の沓（くつ）を落とします。

そして「取って、履かせよ」と先生は命じます。

張良は、内心ムッとしますが、そこは先生のお言いつけですから、黙って拾い履かせました。

別の日、また街を歩いていると、馬に乗った石公先生と再び出会います。すると先生、今度は両足の沓をぽとりぽとりと落とし、前回と同じように拾って履かせるように命じました。

張良は以前にも増してムッとしましたが、これも兵法修行のためと言い聞かせ、甘んじて沓を拾い履かせました。

その瞬間、張良は全てを察知して、太公望秘伝の兵法の奥義をことごとく会得して免許皆伝となりました。

〈なにかが変だ？〉

さて、これを読んだあなたはどう思われましたか？

実は、張良も、このことを書いた筆者も、これを読んだ人も、次々とある間違いを犯していくのです。

「間違いを犯す」というのはちょっときつい表現ですので、「誤解をする」と言い改めますね。

まず張良です。

老師は張良の目の前で、ただ沓を落としただけですね？

１回目なら偶然かも知れないけれど、２回目があって、しかも今度は両足ときたのですから、これは奥義伝授のための何かの意味合いがあるのだろうと勝手に考えたのは張良の方です。

老師はそんなことは一言も言っていません。でも、張良も本当に奥義伝授のための何かの意味合いがあるのだろうと勝手に考えたのかどうかすら、ここには書かれていません。

それに、張良がムッとしたこと自体も「誤解」のひとつなのです。

というような内容を、自分の経験に照らし合わせた結果として、書いている筆者も「誤解」をしたのです。

そして、これを読んでいる私もあなたも「誤解」をしているのです。

どんな「誤解」？
なんなのだ、この話･･･？

〈これぞ悟りの極意？〉

はい。そういう風に考えること自体が間違い（誤解）なのです。

これ、悟りの極意なのです。

例えば、ガラスのコップをあなたが手から滑らせて床に落として割ってしまったとしましょう。その瞬間、あなたはどうしますか？　いろんなことを考えませんか？

はい。これが、そもそもの間違い（誤解）なのです。

目の前で起きたことはそのものを見るのみであって、考えることではないのです。起きたその事実だけを見る。これが悟りの極意です。

「ホンマか？」と考えた瞬間に、あなたの誤解が始まるのです。

でも、ニンゲンは悲しい生き物で、どうしても目の前で起きたことに色んなことを考えて理由付けをしようとする生き物なのです。

なんてことをエラソーにほざいている「悟りの極意」という私の言葉自体が、私の誤解そのものかも知れません･･･。

という、お話しでした。
おあとが、よろしいようで。

そういえばワタシの友人で「漁夫の利」のことを「漁利の夫（ぎょりのふ）」と言って、知ったかぶりをしていたヤツがおりました。元気してるのかな？

こちらは「人生塞翁が馬」ですね。

動画撮影あれやこれや

2023年05月27日(土) アメーバブログ

久しぶりに塾のウェブページをいじりました。というのは、前々から動画を挿入したかったからです。が、動画を撮ることにずっとあることが引っかかっていて、踏み出せないでいました。

理由は以下の通りです。

① 不特定多数の人が閲覧するので生徒さんが特定されないか？（いわゆる「身バレ」ですね）

② 生徒さんの姿を入れないで動画を撮ったとして、その信頼性をどこまでアピール出来るのか？

YouTubeを利用して動画をアップするとか、インスタグラムとかFacebookの動画機能を利用するとか、あるいは、TikTokを利用するとか、SNSを利用しない手はないというのは分かっていたのですけれど･･･。

まず、TikTokは早々と候補から外しました。というのは、YouTubeにアップされているTikTok動画を見ていたら、教育関係のものもちらほらと見かけますが、ちょっと二の足を踏まざるを得なかったからです。

まあ、四の五のと言っていないで、何人かの生徒さんに協力をお願いして、とにかく撮影開始です。

既存のスタンドを使おうと思ったのですが、タブレット専用だったので使えないことがわかり、自分のスマホを自ら左で持ちながらの撮影となりました。

多少画面が揺らぎますが、まずまずというところ。

iPhoneからＰＣに動画をコピー。この時点では協力して下さった生徒さんの姿の一部が映り込んでいましたので、モザイクをかけて編集しましたが、どうもしっくり来ません。

こういう動画の場合、「身バレ」がいちばん怖いわけです。

動画の知的レベルは全く違いますが、例の「スシロー事件」でもTwitterにアップさせた瞬間に、動画をアップさせた本人が想像するよりも遥かに速く拡散されて炎上騒ぎとなるだけでなくて、こういう「トンデモ動画」に対して動画内の人物の特定をするのを得意としている人物もいて、あっという間に氏名は勿論、通っている学校の名前や住所なども公開されてしまいました。

動画の内容レベルから言えば教育関係なので、こんなことにはならないとは思いますが、モザイクをかけたとはいえ姿が映るのは良くないということで、アップを断念しました。

こんな感じで、いざアップさせるとなると、いろんな想いが自分の脳裏に現れては消えるので、難しさを痛感させられましたね。

そこで、方法を、プリントや問題集の紙面を映し出させながら、生徒さんとのやり取りを撮影する方へ軌道修正。

すると、これがまた難しい。これは俯瞰（ふかん：上から見ること）が出来るスマホスタンドの必要性を感じながらも、数回は左手で持ちながら一生懸命に撮りました。

実際に撮り始めると、難しいこともありますが、結構おもしろいものですね。

中学生の指導現場を２本、小学生の指導現場を２本をとにかく撮影し、親御様のご快諾を得てウェブページにアップさせました（６月初旬時点）。

お子さんの学習現場をときおり撮影して、親御様のLineメッセージに載せるのですけれど、今までは写真（静止画像）のみ。

今回、ご承認いただくために動画をご覧に入れたのですが、好評をいただきました。ホンマはＺＯＯＭ授業の録画も撮りたいのですが、こちらは生徒さんのお顔がモロに入りますので、さてどないしようかと思案中です。

思わぬ副産物

2023年06月09日(金)アメーバブログ

ウェブページに指導現場の動画を掲載するために、「これは動画にしたい」と直感的に感じたときに撮影しては、ＰＣの動画編集アプリで編集し、せっせとYouTbeにアップしています。

動画撮影にふさわしいようなシチュエーションが出て来たら、ぜひ協力してもらいたいことを事前に生徒さんにお願いしていることもあって、幸いにも結構すんなりと撮影を進めることができています。

お願いのときには、こちらが絶対に守るべき条件をお伝えします。

① 動画内で生徒さんの氏名（相性も含む）を言わないこと。

② 本人が特定されるようなものは撮さないこと（特に顔ですが、特色のあるデザインの衣服など）。

つまり、身バレをさせぬように配慮することが第一条件となります。

ということで、直前の記事の最後に掲げた写真のようなツールを手に入れて、手元と声だけを撮影できるようにしました。

不思議なのは（というのか、多分ワタシが仕組みをよく分かっていない）、ちゃんと確認して撮影したはずなのにＰＣにコピーした動画を見ると、逆さまになっていたり、縦向きになっていて妙に見づらかったりすることも間々あります。なので、ＰＣ用の動画編集ソフトで動画の向きを正方向に直します。

それと、実はワタシ、よく計算ミスをするのです。

小学６年生の小数と分数混合のやや長い四則計算式の解説をする動画を撮影中に、「12×７＋６」の計算で、答は「90」になるはずなのに、動画内でナンと「80」と、しかも平然と言いながら書いているなんていうことが、結構あるのです。

いざ動画にしてみるとおもしろいもので、第三者的な見方をするのか、反省材料とか工夫箇所などが見えたりもしますし、おそれている計算ミスをしているのを発見すると、顔から火が出来るような思いをさせられたりで、その部分をカットして別の撮影分とをくっつけたりと、いろいろと手間もかかる反面、撮影する前まではなんだかんだと面倒がっていたのですが、いざしてみると、これが結構楽しいのです。

撮影後は、ややデータが大きくなるのですが、そのままを、撮影に協力して下さった生徒さんの親御様のLINEメッセージに載せてご覧いただきます。

大抵の場合は快諾していただけますし、何よりも、指導の現場を親御様が見て下さるということで、大きな安心をお届けできるのです。

というのは、塾というのはある意味で密室だからです。

学年の低いお子さんであれば、塾への行き帰りは、余程お忙しくない限りは付き添われます。

「じゃあね～」と塾舎に入るお子さんと「一次のお別れ」をしたあとお子さんが塾舎に入られると、その日におこなわれた課題の内容やその正誤の具合、あるいは、指導者側からの書き込みなどで、塾舎内でどのような指導を受けているかを推測することは可能です。

お迎えに来られて、

「今日はどうだった？」

という親御様の問いかけに、幼い子であれば、

「楽しかったよ。」

とはいうものの、どんな指導を受けたのかを説明出来るだけの語彙力はまだないので、

「ウチの子が楽しそうにしているのなら、まあ安心かな･･･。」

というような推測の域を出ません。

それに、お子さんが中学生ともなると、反抗期も手伝って、話そうとしなくなります。

すると、親御様から快諾のメッセージだけでなくて、ご相談メッセージや思わぬメッセージをいただけるという好機にも恵まれるのです。

その中には、ワタシごときでは生まれ出ない親御様ならではの表現があったり、ずっと言語化できないでいたことを見事に代弁して下さっていたりで、本当に宝物になるのです。

例えば、ワタシが口癖のように言う、

「再現性のない指導は、指導とは言えない。」

というのがあるのですが、これもお母様からいただいたお言葉なのです。

あるいは、「お母さん目線が塾目線」もそうです。

そして、今回も大きなヒントをいただきました。もしかすると、ワタシのこれからの国語読解指導方法の確立を加速させるかもしれないほどのお言葉でした（その言葉は、冒頭記事「『「ふれ合う』から『向き合う』へ」につながります）。

どうしてこんなところに魔女の絵が？」

そう思われた方は「編集後記」へ。

お詫び

「先生、６月のニュースレターに、答がなかったやん！」という、スルド～イご指摘を、ある生徒さんからいただきました。５月号を確かめたら確かに「６月号をお楽しみに！」とエラソーに書きながら、失念しておりましたので、７月号をお借りして、解答解説をさせていただきます。こういうご指摘をいただけるということは、この拙いニュースレターでも真剣に読んで下さっているということですので、感謝の極みです。

Let's Challenge!

小学４年生のちょっと高度な算数問題です。
■を「a」、▲を「b」、●を「c」、★を「d」と置いて･･･、
という数学の方法（連立方程式）では解けません。
値の分からない文字（記号）の数だけ式が必要です。
■・▲・●・★と４個の記号があるけれど、４つめの式の答えが分かりません。
ですから、連立方程式では解けないのです。
あなたはどのようにして解きますか？（解説解答は６月号をお楽しみに！）

４つの数●，▲，■，★にそれぞれ次のような関係があるとき，□にあてはまる数を書き入れなさい。

① ●－▲＝6.24
▲－■＝2.55
■－★＝5.245

上の３つの式が成り立つとき，
●－★＝□

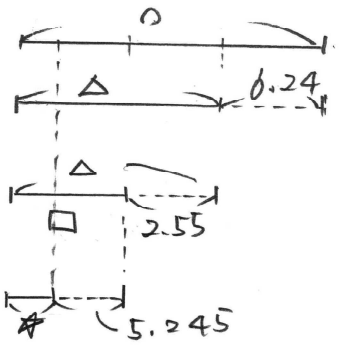
② ●＋▲＝15
■＋★＝9.67
▲－★＝3.45

上の３つの式が成り立つとき，
●－■＝□

これができるとかっこいい！

長さが●cm，▲cm，■cm，★cmの４本のぼうを想像して，差を考えたりつなげたりしてみるといいよ。

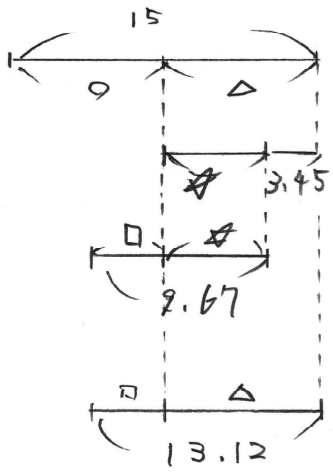
①



5.245
2.55
＋ 6.24
14.035

☆ ＋ 5.245 ＋ 2.55 ＋ 6.24 ＝ ○
○ － ☆ ＝ 14.035

②



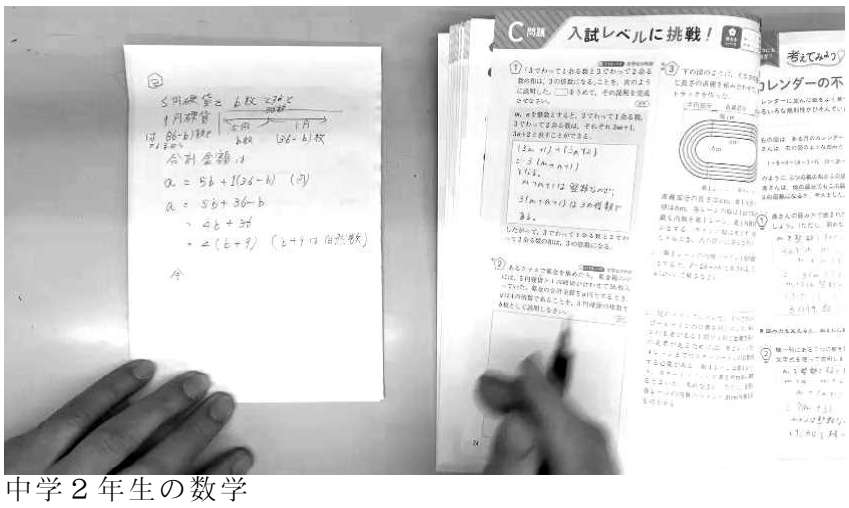
△ － ☆ ＝ 3.45
△ ＝ 3.45＋☆
☆ ＋ □ ＝ 9.67

△ － ☆ ＝ 3.45
＋) ☆ ＋ □ ＝ 9.67
△ ＋ □ ＝ 13.12

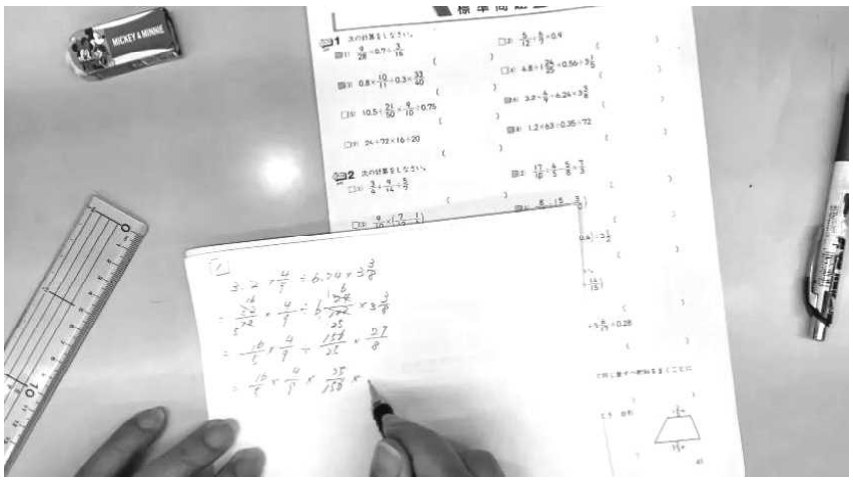
○ ＋ △ ＝ 15
－) □ ＋ △ ＝ 13.12
○ － □ ＝ 1.88

9 － □ ＝ 1.88

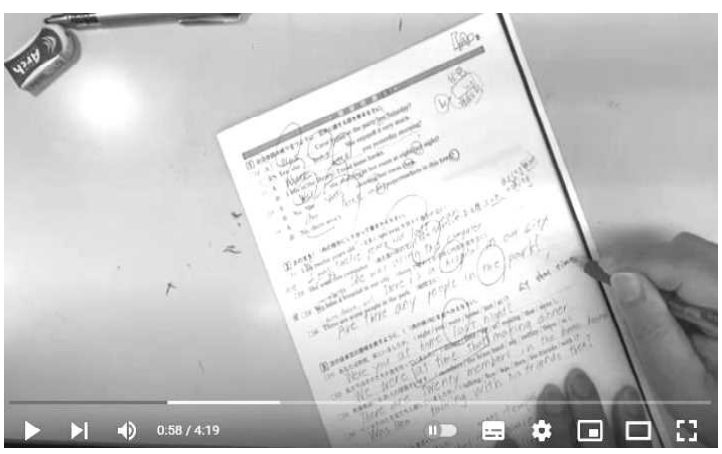
YouTubeにアップした動画の一部です（HPにも公開しています）。



中学２年生の数学



小学６年生の算数（分数・小数の混合計算）



中学２年生の英語

YouTube動画

編集後記

ワタシ、「ぎっくり腰」は日本人特有のもので、欧米の人々はならないと思っていましたが、アメリカでは社会人の欠勤理由の第一位にあげられるほどだと知って驚きました。

ちなみにドイツ語ではぎっくり腰をこう言います。

Hexenschuss（ヘキセンシュス）。意味は「魔女の一撃」。「Hexen魔女」と「Schuss一撃」の２語が合成された言葉です。

英語では「whitch's shot」。

「I think I got witch's shot.」で「ぎっくり腰になったっぽい。」

なんていう表現をするそうです。

いつのデータかは忘れてしまいましたが、国民皆保険制度のないアメリカでは国民は民間の保険会社に掛け金をして、いざとなったらその中から支払うそうですが、「ぎっくり腰」での申請があまりにも多くなり、保険会社が悲鳴を上げたことで、国家的案件にまでなった年があったそうですから、世界共通のもののようです。

ところが「ぎっくり腰」はあくまでも通称であって、医学的な名称がないのです。大抵は「急性腰痛」として扱われます。

確かに、ドイツ語にしても英語にしても「一語」ではありませんので、あのたとえようのない痛みはそのまま一言で表すことの出来る言葉もないという意味では、やや質の良くないの悪いシャレみたいですね。

「あっ！　ヤバイ！」と思った瞬間にはキテマス。「あっ！　キターッ!!」ですものね。

急性期には冷却し、痛みが緩和されたら温めるのが良いそうですが、ワタシ、これをして２年前にエライ目に遭いましたので、参考になさらない方が良いのかと･･･。

で、ナンでこんな話をするのかというと、現在のワタシがちょいと危険な状態だからです。ある特定の動きをすると右の背中側の股関節と腰周りに「ピキッ！」と鋭い痛みが走ります。

いつもお世話になっている鍼灸師先生によると、毎年５月と６月に多いそうです。重い荷物を「エイヤッ！」と持ち上げたときだけでなくて、くしゃみひとつをしてもなるときはなりますとのことです（気圧の影響かも？）。

その先生によると、背中と腰回りの筋肉の捻挫なんだとか。時々生徒さんから「どんな痛さ？」と尋ねられることがありますが、たとえようがないのですけれど、

「運動をしていて足首を捻挫したことある？　あの痛みを腰に持って来た感じ。」

と伝えています。

最近はご自宅でいわゆるテレワークをする方も増えていて、お若い人でもなるそうなので、ご用心あれ。「天災とぎっくり腰は忘れた頃にやってくる。」

（*by Shirousagi*）